

News letter

噴火灣文化

【Funkawan Culture】

2012. 3 Vol. 6



Date City Institute of Funkawan Culture

伊達市噴火灣文化研究所

■インタビュー「*Fieldworker*」

【絵画】だて噴火湾アートビレッジ・アートディレクター

永山 優子 …………… 3

■研究報告

【地質】「1640年に有珠を襲った巨大津波を『掘る』」

北海道開拓記念館・学芸員

添田 雄二 …………… 6

【博物館学】「『柿渋』づくりによる地域資源の再発見と活用ー柿渋プロジェクトー」

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員

青野 友哉 …………… 9

【博物館学】「武家文化財調査修復事業について」

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員

伊達 元成 …………… 12

■シリーズ「*Folklore*ー伊達の民俗ー」

伊達市市民生活文化伝承者 法螺貝吹き

佐藤 三治 氏 …………… 16

表紙

野田弘志 「赫い薔薇」 Red Roses 2005

〔91.0×91.0 油彩 春風洞画廊蔵〕

【絵画】

「積み重なる『存在』へのまなざし」

画家 永山 優子 氏

第六回目の「**Fieldworker**」は、画家の永山優子先生です。永山先生は、写実画家として自身の制作を行うだけでなく、伊達市噴火湾文化研究所でアートディレクターとして活躍されています。絵画教室や制作、そして展覧会について話を伺いました。



永山優子（ながやま ゆうこ）

画家。1975年8月生まれ。

広島市立大学大学院博士課程修了。
だて噴火湾アートビレッジ・アートディレクター。

—— だて噴火湾アートビレッジが6年目を迎えました。

これまでの印象をお話いただけますか？

私は絵画教室講師として活動に関わってきました。

一般的な絵画教室というのは作品を次々と作って、それがたまと展覧会をする、ある意味モノを作る場所という性格が強いわけです。その個々の制作の中で必要な技術や方法を先生から教わるという体質ですよ。

しかし、アートビレッジの絵画教室は絵を形作ることよりも、「なぜ絵を描くのか」を考えるのがメイン。考えることで制作を深めていくことがこの理念だと聞いていたので、時間割から内容まで、何もかも発想が違っていました。

以前、学校や絵画教室で教えた経験もありましたが、そのままでは役に立たず、最初の頃はかなり試行錯誤しました。

この頃は「野田・永山塾」と謳うとおり、本当に絵画教室ではなくて「塾」になってきたなと感じます。要するに、人材を養成するわけですね。

—— 理想の絵画教室、絵画教育みたいなものは見えてきましたか？

私自身、新たに絵を描き始めるたび初心に帰る感覚があるので、長く続けている受講生との関わり方が、教える人と教わる人という感じではなくて、意見交換する関係になってきている。いよいよみんなで本当の芸術とはなんなのか、そういう事を語らう理想に近づいてきたと思います。

—— 生徒さんは変わってきましたか

子供にしても大人にしても、入ってすぐの時は、我々がこんな塾にしたいと意気込んでいることはまったく自覚していないわけですね。まあ、手先の器用さで上手く描く人はいますが、制作とはどういうことか、自分自身の何を形にするのか、そんなに深く考えてい



なかったと思うんですよ。

でも、5年やっている、みんなとても進歩しますね。絵が上手になるというのは、要するに自分のやるべきことは何かに

気がつくこと。それが技術的な向上に繋がっていくと思うんです。それを実現できるまで根気強く取り組める人が受講を続けていますね。

途中でいろんな事情があって塾を去らざるを得なかった人達というのは、こういう言い方は失礼ですけど、絵が一大事ではなく、いわゆる「趣味」なんですよ。『絵を描いていないと生きていけない』くらいのめり込んでいる人が続いていると思います。

描くことだけではないですね。特に大人の教室では野田弘志先生が自らの経験をふまえた哲学をお話しして下さるので、知的教養を深めることを求めて集まる人もいます。芸術を通じて、生きていく上で有意義な時間を過ごせる。そういう場所を作るのがすごく大事だと思います。

その意味では、絵画教室だけではなく、ピアノマスタークラスも同じですよ。なかなか取っつきにくいかもしれないけれど、だからこそ、水準の高い世界に触れられるチャンスをどこかで作っていかねば、知らずに一生を終わるかもしれません。どこにも無いようなチャンスは、特に子供のためにはできるだけあった方がいいと思っています。

—— ご自身の制作について、この5年間はいかがでしたか？

私自身の制作のテーマは、まずモチーフとして人間を描くのは変わらないんです。でも、人間の何を描くのかというところが、伊達に来てから大分変わったというか、考えが構築されてきたと思います。

以前はモデルになってくれた人間を見て、「この人が生きていることを描く」という意識で制作していました。でも、伊達に来てからは、モデルを描くことは変わらないんですが、自分自身も生まれて、生きて、老い、それで毎日考え方が変わっていく、つまり自身の日々変化する思考とか視線というものを画面に蓄積していくという考え方に変わってきました。

写実画というのはよく「客観描写」と言われます。誰が見ても本物だと思えるようそっくりに描くところが写真やコピーみたいだと言われますけど、私はやればやるほど「主観」の世界だと思います。ある人間が

モチーフやモデルをどう見るかという、一つの視線でしかない。だけど、その完璧を一瞬にして捉えるのではなくて、変化する思考の下に繰り返される発見をずっと蓄積していくのがすごく大事だと思っています。

先日、ヨーロッパへ行った時も思いましたが、生まれて、生きて、段々朽ちていって、死んでいくことを、物なり人なりを見てどう考えるのかを絵にしないと駄目だと感じました。知識のみに裏付けられた観念的な作品と、実際に見て感じるが乗った作品とでは質が全く違うことに、この頃ようやく気づきました。

それで、こういう作品（5頁右写真）に取り組んでいます。今回は写真を基に描いているので、始めた当初は写真を絵に描く意味はあるのかという疑問がありました。また題材が持つ芸術的可能性は果てしなく大きいのに、自分はその表面的な特徴しか見ていないのでは、とも悩みました。しかし2年前に取りかかった頃よりも、何を描くのかといった制作に対する考え方が明確になってきて、再び描こうと思うようになりました。この間に一人の画家として制作を続けていく姿勢が固まってきたように感じます。

—— 著書や新聞連載で絵画論を書かれていますね、制作活動において、それは重要なですね

先日、詩人の高橋睦郎先生の講演で、先生が「人は言葉でものを考える」と仰っていました。確かに絵を描きながら「これではいけない気がする」と感じることはできますが、何がどういけないのかを言葉という形にした方が問題をより深く自覚できます。

ただ、自身の書いたものを読み返してみると内省的な事ばかり書いていますので、もっと写実することや絵画という表現のすばらしさについて、前向きに書いてもいいかなと思っています。

いずれにしても文字に表すことで目指すところが見えて、整理が付きますから、文章を書くことは大事だと思います。苦手なので、苦しいんですけど・・・。

—— 野田先生もその辺を重要視していますよね

そうですね。絵を描く人に限らず、人は自分の中の何かを明らかにするために表現するわけですよ。けれど表現したときに、自分だけが形にできたと満足して完結するんじゃなくて、それを誰かが見て共感したり影響されることを目指していると思うんです。ですから表現する時には、自分の中の何かを徹底的に自覚する必要がありますよね。よくわからないままどんな形にしたところで、見る人にもそれが何なのかわからないと思います。その意味でも文章を書くのは大事になってきますね。

—— 現在、取り組まれている作品について教えてください

今は、「発掘現場」と「子供」です。いずれも人間が生まれて、生きて、死ぬという極々当たり前の流れの一場面です。だけど、それを直接目の当たりにして実感するという機会は、人生の中で段々少なくなっている。そのことをこの発掘現場で感じます。子供は小さくても、存在の重みとして大人に劣るわけじゃない。当たり前のことだけど、本当に何にも代えられないじゃないですか。

—— 一見別なものを描いているような印象ですが、そうではなく対になっているのですね

同じテーマですね。この人（発掘現場）もよくぞこんなに立派な人間の形で出てきたなと感動しました。誰もが行き着く姿ですけど、それを実感させられたし、だから今この時間を生きようと思わされました。

骨について、最初は恐れを抱きますけど、みんなの中にこのような形があると思うと、畏敬を覚えます。それから形が好ましい状態で絵になるとかも考えます。だけど、そういう美しさと自分の表現したい「美」とはまた次元が違ふと思いたい。存在そのもののかけがえのないことが美しいと思いたいんです。

人間を題材に制作することが多いので、ついモデルの生きている時間を思うんですけど、何を描いても同じなんですよ。つまり私自身が生きていつかは死んでいくので、例え無生物を描いていても、そこに今の自分の時間が関わってくるという意味では、やっぱり生きることを描いていると考えるようになりました。今は逆に「生きる」ということを描かないと、意味がないと思うんです。

最近はパソコンなどによる画像処理技術を活かして、制作の能率が上がっているといいます。それに伴って技術的に目を見張る作品を作る人が大勢いますが、作品に生きることをの実体が表れているのかどうかは疑問に思います。そうしてみると、美術館に大事に保存されている過去の名作たちには、やはり、生きている



制作中の「Man is —. USU4GP020」(左)と「Man is —. YU」(右)

ことが表現されていると思えるんですよね。今の自分に危機感を感じますよね。技術は向上するけれど、自分が生きて、死ぬことと無関係に作品を作っている気がして……。特に写実をやる画家はそここのところを表現しないで何を描くのかと思うんですよ。

—— 第2回目の伊達市噴火湾文化研究所同人展が2012年5月からスタートしますが、意気込みをお話していただけますか

今、話してきたようなテーマへの取り組み方とか、絵画を描くとはどういうことなのかを、このアトリエで悶々と考えたり描いたりして毎日過ごすわけですけど、自分で「考えた」、「描いた」、で終わってしまったら趣味と変わらないと思うんです。それが人の目に触れて、作者も見る人も何か通じ合い、何かが変わるのがすごく大事だと思うんですよ。

ただし、主義の無いただ並べるだけの発表をすればいいとは思わないので、現在はこの同人展以外は発表していません。ですから、同人展はとても大事な機会なんです。これに向けての制作は、「美とは何なのか」について、考えを言葉にしなければいけないですし、そして何より作品でわかってもらわなければいけません。

「あなたにとって美はそうだったの、ふ〜ん」と他人事で終わるのではなくて、つまり、知識として理解されるのではなくて、ある場面から感じた「存在」が、どんなにかけがえのないものかということ、それは常に変化して、いずれなくなるということ、それが「存在」なのだと作品が語らなければ駄目なのです。

—— もう少し制作活動が続くと思いますけれど、お体に気を付けて下さい

インタヴューアー：大島直行

■第2回伊達市噴火湾文化研究所同人展は、7月1日～8日（札幌：北海道庁旧本庁舎・赤レンガ庁舎）、11日～18日（伊達：だて歴史の杜カルチャーセンター）で開催されます。



研究報告
【地質】

1640年に有珠を襲った 巨大津波を「掘る」

北海道開拓記念館・学芸員 添田雄二氏



■17世紀の古環境を探る

私は、数年前からアイヌ時代の環境を復元する研究に取り組んでいます。私の研究手法は地層に記録された環境変動の証拠を堆積構造や化石を調べて明らかにしていくというもので、これまで実施してきた調査の結果、17世紀が特に寒冷であることがわかりました。そのため、最近では17世紀にターゲットを絞り、さらに、寒冷環境がアイヌ民族へどのような影響を与えたかについても探ることにしました。この研究課題を明らかにするためには、これまでの手法に加え、17世紀のアイヌ民族の遺跡を実際に発掘して各分析を行うことが最も有効な手段となります。そこで、新たな調査地として設定した場所が、伊達市有珠でした。有珠には、確実に17世紀であることを証明できる遺構や遺物を含む遺跡が存在するからです。この証明を可能にしているのが「津波堆積物」の存在です。

■津波堆積物とは

昨年3月11日、宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0の超巨大地震が発生し、それにもなう巨大津波が東北地方の太平洋沿岸域を襲いました。この津波は、海岸から数km内陸まで到達するような巨大なもので、陸に侵入する際に浅海底や海浜・砂丘、そして表土を浸食し大量の砂を（場所によっては礫や泥も）運びました。それらは厚さ数cm～数十cmの砂層となって地表に堆積し、また、津波が引いた後もしばらく冠水していた場所では、砂層の上に泥層が形成されました。このように、津波によって形成された堆積物の総称が津波堆積物と呼ばれています。海岸から内陸に数百m～数kmも侵入するような巨大津波は、基本的には地表の広範囲に津波堆積物を形成します。そして、長い年月をかけてそれらの上に新たな地層が

形成された場合、地中に埋没した過去の巨大津波の痕跡（古津波痕跡）となります。この古津波痕跡が有珠にも残されているのです。後述するように、それは1640年に発生した巨大津波によって形成された津波堆積物でした。

■1640年に発生した巨大津波と有珠の遺跡群

1640年に有珠を含む噴火湾沿岸が津波に襲われていたことは、複数の古文書の記録によって以前から知られていました。そして、それが渡島半島の駒ヶ岳が噴火した際に山頂の一部が海に崩落して発生した津波であったこともその記述から明らかとなっていました。また、この津波は100余隻の昆布取船を破壊し、700名余りが溺死するほどの巨大なものであったことも記されており、さらに、西村・宮地（1998）によって、この津波の痕跡、すなわち津波堆積物が道南の森町から白老に至る沿岸域に分布していることが確認されていました（2006年発行の本誌第2号に関連記事が有り）。しかし、有珠も含め、各地でどのくらい内陸まで津波が侵入したかについては古文書に記載が無く、またそれを裏付ける具体的な津波堆積物の分布データもほとんどありませんでした。ただし、有珠のポンマ遺跡や有珠4遺跡などでは発掘調査の際にその痕跡らしき砂層が確認されており、その上位に堆積する1663年の有珠山火山灰(以下、Us-b)との層位関係から、形成年代が1640年から1663年の間とされる遺構や貝塚が報告されていました。これはまさに私が求めていた遺跡であったのですが、砂層を津波堆積物と認定した具体的なデータや根拠が示されておらず、実際に確かめる必要がありました。そこで、伊達市噴火湾文化研究所と共同でポンマ遺跡を発掘することになり、さらに、地質調査の際に偶然発見した遺跡（後にカムイタプコプ下遺跡と命名）でも同津波の痕跡らしき砂層が確認されたことから、近隣市町の考古学専門学芸員や道内外の自然科学系研究者に協力を依頼し、有珠において学際的共同研究を実施することにしました。

■津波堆積物の認定

有珠の各調査地点で確認できた古津波痕跡らしき砂層は、Us-b（AD1663）より下位の黒色土壤中に厚さ数cm～十数cmで挟在している状態で見られ

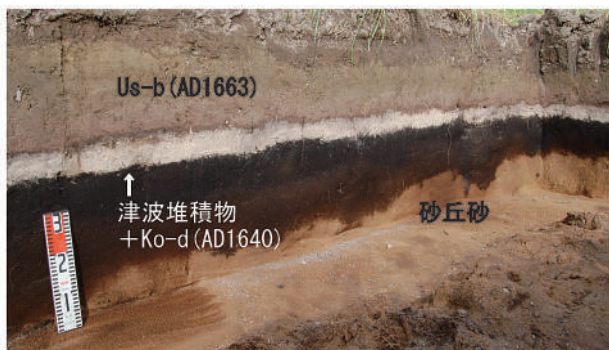


写真1 古津波痕跡（津波堆積物） 伊達市有珠町

ました(写真1)。また、調査側線を設定して砂層の側方変化を順に見ていきますと、現汀線から離れるにしたがって層厚が相対的に薄くなり、さらにレンズ状となってやがて消滅することがわかりました(図1)。また、粒度分析の結果、これらの砂層を構成している砂は、海側の調査地点の方が陸側のそれより粗いことが判明しました。すなわち、海側の砂層の方が厚くて粒が粗い、ということになります。次に、砂層の堆積環境ですが、水成であることを示す明瞭な堆積構造は確認できませんでしたが、海や川など水中(一部陸上)に生息する珪藻(微細藻類)の遺骸が検出されました。これを、砂層下位の黒色土壌中の珪藻遺骸と比較した結果、黒色土壌からは海生種が産出せず陸生種が全体の約90%産出したのに対し、砂層からは海生種が約80%も産出しました。また、珪藻遺骸の完形率は黒色土壌が約60%でしたが、砂層では約30%でした。この他、砂層の中にホタテガイやアサリの殻が含まれている地点もありました(写真2)。以上の結果は、砂層が海水の影響を強く受けて形成されたことを示し、特に砂層中の珪藻遺骸の完形率が下位層

の半分以下であることは破損した殻が外力によって集積していることを意味します。これは、強い水流の影響によって離れたところから運ばれてくる過程で遺骸が破損した可能性を示唆しており、このことは、砂層の基底に明瞭な浸食面が認められることと調和します。よって、本砂層は、海水が突発的に流入した際に海域から運搬・形成された津波堆積物であることが明らかとなりました。また、砂層の最上部にはレンズ状に白色の火山灰が堆積しており(写真2)、分析の結果、1640年の駒ヶ岳噴火火山灰(Ko-d)であることが

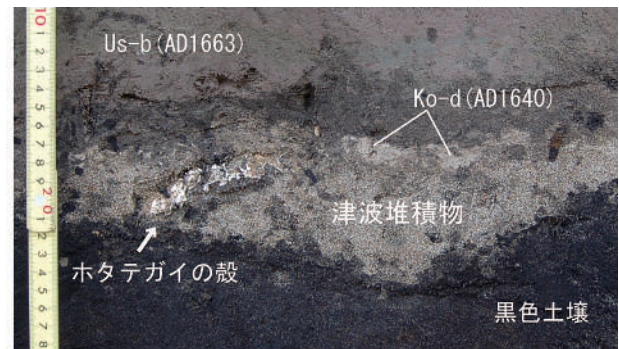


写真2 1640年駒ヶ岳噴火津波の痕跡（ボンマ遺跡）

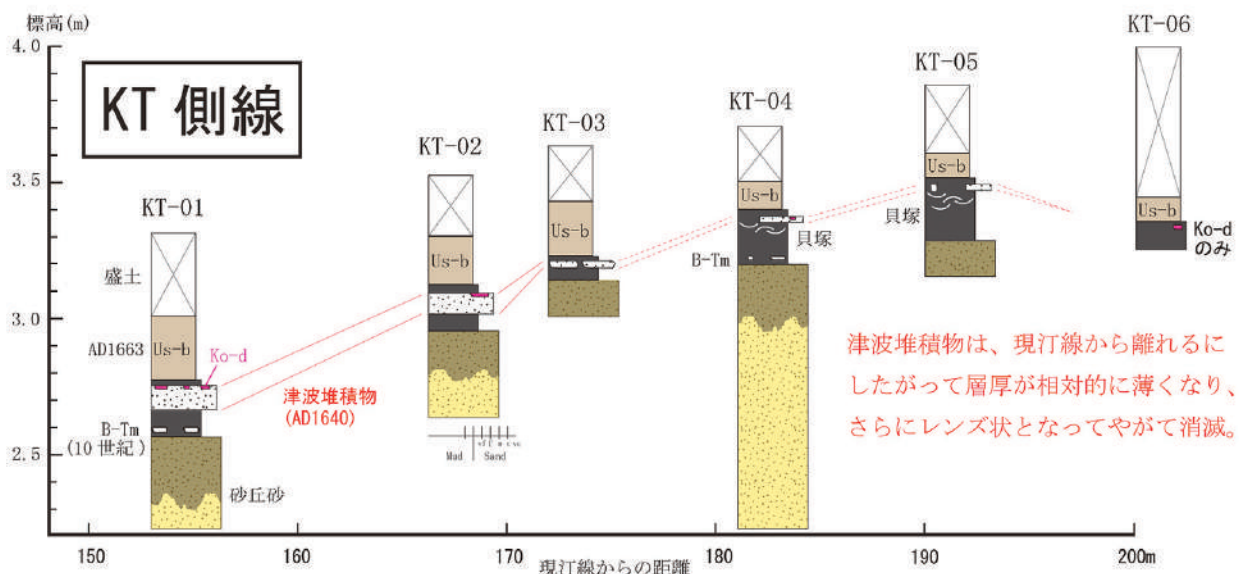
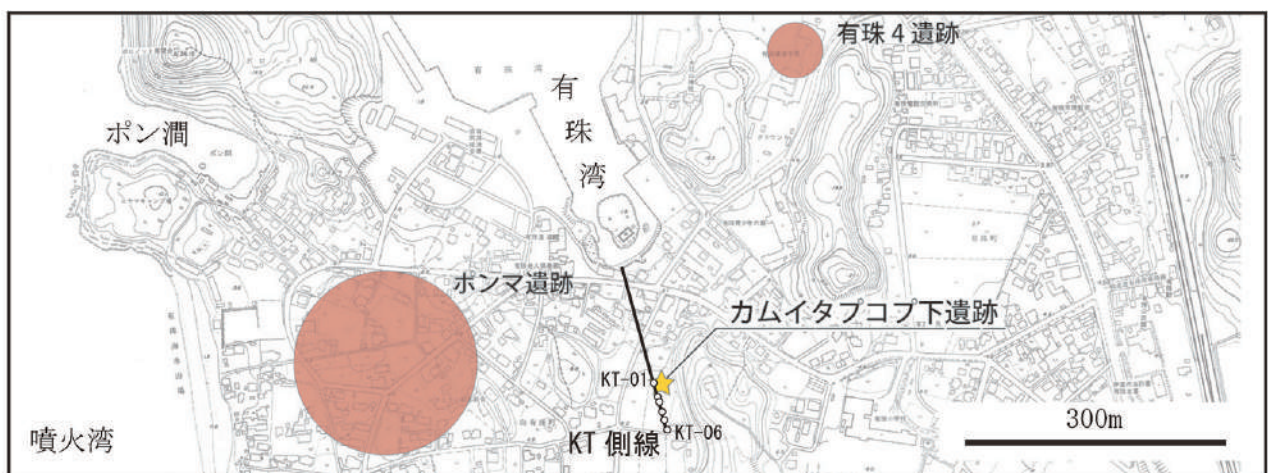


図1 有珠湾周辺における遺跡の位置と調査側線上の各地質柱状図

判明しました。このことから、各地点における当該砂層は、1640年の駒ヶ岳噴火にともなう津波によって形成されたことが明らかとなりました。なお、当時の津波は、1960（昭和35）年に有珠に到達したチリ沖地震津波と同様3方向から侵入したこと、ただし遡上範囲はそれ以上であったことが判明し（図2）、少なくとも現汀線から250m内陸まで到達していることが確認されました。なお、まだ分析中ですが、それよりさらに内陸へ遡上していた可能性があり、いずれにせよこの津波が現在の国道36号線を越えて内陸へ侵入するような巨大津波であったことがわかりつつあります。したがって、各遺跡中に津波堆積物が確認されることからわかるように、当時内陸部でも相当の被害が与えられたことが予想され、古文書からは知ることができなかった有珠内陸部での津波の実態が明らかとなってきました（添田ほか、2010,2011）。

■古文書からのアプローチ

同津波については、古文書の記載から遡上高を評価する研究も行われています。つじ（1989）は、維新前北海道変災年表の「有珠に於いては、波浪善光寺如来堂の後山に上がりしが、堂は幸ひに恙なかりき」という記述に着目し、如来堂の位置は伝承より1600年前後の創建以来現在まで不変であるとした上で、現在の善光寺にある如来堂の敷地の高さ（標高8.01m）と後山との関係をもとに、この津波の有珠での最大遡上高を標高8.5mと見積もりました。しかし、その後、福田（1994）によって、1640年当時の善光寺と如来堂は、現在の場所から南東に約750mの現「地藏堂」のある場所に位置していたことが明らかにされました。地藏堂の敷地の標高は7.60mであることから、つじ（1989）の手法を単純にあてはめると、最大遡上高は約8.1m+となります。なお、これまで私たちが実施した有珠地区での地質調査の結果、同津波は最低でも標高4.4mまで遡上していることが確認されています。今後、有珠地区における本津波の最大遡上高や最大内陸到達地点を明らかにするには、このような地質調査による基礎データを増やすことが重要であ

り、また、津波堆積物の分布範囲をもとにした様々なパターンの津波シミュレーションを行うことも必要と考えています。

1640年駒ヶ岳噴火とそれにともなう津波はアイヌ時代起きた異常な規模の自然災害イベントであり、人々に多大な影響を及ぼした可能性があります。さらに、この津波堆積物は、Us-b同様、本調査地域における遺跡（遺構や遺物）の年代を絞り込むための重要な鍵層となっています。したがって、今後さらに有珠地区におけるこの津波イベントの実態を明らかにしていくことも、重要な課題の一つです。

■引用文献

- 西村裕一・宮地直道（1998）北海道駒ヶ岳噴火津波（1640）の波高分布について．火山，43-4，239-242．
 添田雄二・青野友哉・菅野修広・山田悟郎・池田陽香・鈴木明彦・都郷義寛・渡邊 剛・早田 勉・赤松守雄（2010）伊達市ボンマ遺跡における地質学的・考古学的発掘調査-速報-．北海道開拓記念館調査報告49，75-86．
 添田雄二・山田悟郎・鈴木明彦・都郷義寛・池田陽香・渡邊 剛・吉本充弘・早田 勉・中村賢太郎・青野友哉・松田淳子・久原直利・菅野修広・赤松守雄（2011）アイヌ文化期における小氷期とその影響に関する研究-伊達市ボンマ遺跡および千歳市末広2遺跡での調査報告-．北海道開拓記念館研究紀要39，73-90．
 つじよしのぶ（1989）寛永17年6月13日（1640VII31）北海道駒ヶ岳噴火による津波（演旨）．地震学会講演予稿集，1，261-261．
 福田茂夫（1994）松前藩進出以後の伊達地方．伊達市史，188-202．

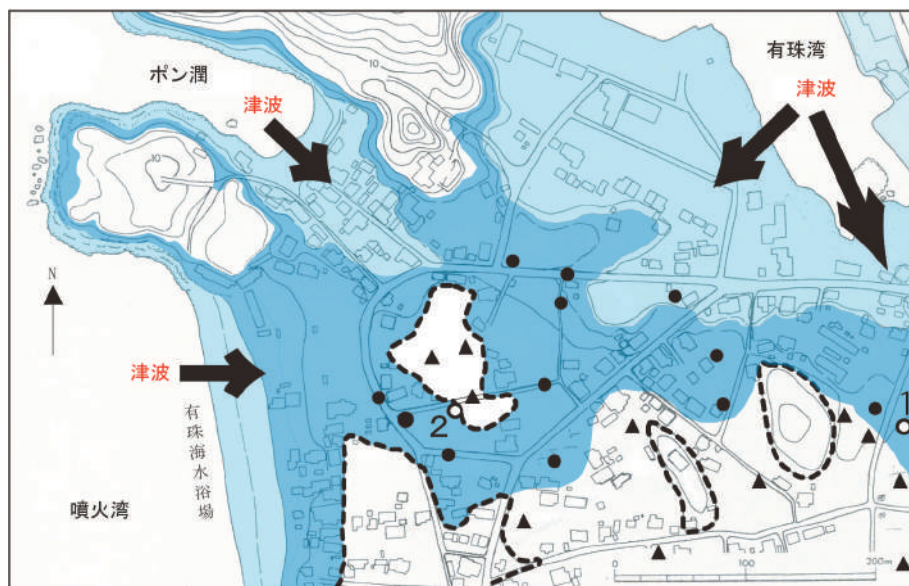


図2 カマイタブコブ下遺跡およびボンマ遺跡周辺における1640年津波堆積物分布範囲

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------|
| ○ 1:カマイタブコブ下遺跡、2:ボンマ遺跡（※トレンチを掘削した地点） | ▲ Us-bのみ |
| ● 1640年津波堆積物+Us-b | ■ 1640年津波堆積物分布範囲（最低遡上範囲） |
| ■ 1940年チリ沖地震津波遡上範囲 | □ 小丘（標高5m以上） |



研究報告
【博物館学】

『柿渋』づくりによる地域資源の再発見と活用 ー柿渋プロジェクトー

伊達市噴火湾文化研究所学芸員
青野友哉

1. 「柿渋」ってなに？

柿渋とは、柿の果汁を発酵させた液体のことで、防水・防虫効果があることから、木造住宅の外壁塗料や、衣類などの染料、さらには生活道具などの接着剤として用いられていました。柿渋の歴史は古く、平安時代から作られており、今でも、竹籠と和紙からなる工芸品「一閑張り^{いっかんばり}」などに使われています。

最近では、シックハウス対策として天然塗料の柿渋を内装材として使用したり、柿渋塗りの和紙をランプシェードにするなどオシャレなインテリアとして活用されています。さらには防臭効果に着目した「柿渋石鹸」は加齢臭を気にする中高年に人気となり、大ヒット商品になりました。

ここでは、伊達市のシンボルである柿を活かした取り組みについて紹介します。

2. 伊達市と柿の木

亜熱帯性の植物である柿の木は、本来北海道には自生しません。現在、道内では、北海道大学植物園などでみられますが、庭木や街路樹として生えているのは伊達市だけです。では、伊達市における柿の木の歴史をたどってみましょう。

現在、市役所前通り商店街に街路樹としてある柿の木は、平成6年に当時の西胆振農業センターで育てた苗木を植樹したもので、今では「あいあい柿まつり」といったイベントが開催されて地域に愛される存在になっています。この頃、苗木を一般市民に配布したことから、自宅の庭に柿の木を植えた方もいるようです。

この植樹以前には、柿の木は伊達市役所と伊達市開拓記念館、水車アヤメ川公園、国道37号線と市役所通りの交差点、清住・弄月・稀府の農家住宅にあ

る程度だったといえます(松田1994)。

伊達市は仙台藩一門亘理伊達家主従が移住した歴史があります。移住を主導した伊達邦成公



写真1 伊達市役所前通り商店街の柿の木



写真2 柿渋プロジェクトのポスター

は、西洋農具の導入による近代農業を実践するとともに、邸宅の敷地を苗圃として食用や産業と結び付く樹木の育成を試みました(伊達町1949)。

例えば、明治8年以降には、開拓使が配布する林檎・梨・桃・杏・李・梅・サクランボ・ブドウなどの果樹や、養蚕用の桑の苗木により、これらの実験的栽培が行われます。

ところが、この明治初期の段階では「柿の木」についての記述は見当たりません。管見で最も古いものは、伊達町史編纂にあたり果樹の現状を調べた昭和23年の記録に、「柿34本、収穫高68貫、価格13,600円」と記されています(伊達町1949)。もちろん、これ以前からある可能性は高いのですが、今のところ初めて移植された時期は明らかではないのです。

とはいえ、お雇い外国人の指導を受けた開拓使は主に外国産品種の奨励を継続していることから、柿の木は亘理ゆかりの移住者が独自に本州から持ち込んだものと考えられるのです。

この柿はもちろん食用とすることもできますが、む



写真3 浅見醸造店の「絞り袋」。
所蔵：伊達市噴火湾文化研究所

しろ郷里の亘理を懐かしみ、風景を再現する意図があったのかもしれませんが。さらに、これは今後検証する必要はありますが、柿渋として日常生活のあらゆる場面で利用していた可能性があります。

例えば、明治25年建築の市有形文化財迎賓館の外壁塗料や、明治

33年に増岡重平が始めた醤油醸造及び、明治34年に浅見為三郎が始めた味噌醸造に用いた絞り袋の塗料として、自家製の柿渋が使われた可能性も十分考えられるのです(写真3)。

3. 柿渋プロジェクト始動

このように伊達市の柿は移住の歴史を背景とした、この地ならではの資源だといえます。これまでも地元の商店街が知恵を絞り、柿を用いたイベントも行われてきました。これに加え、最近全国的に注目される「柿渋」とその加工品を開発することで、地域をより豊かにできる芽があると考え、市役所通り商店街振興組

合(小野勝多理事長)の主催、かけはしの会の協力で、柿渋プロジェクトが始動しました。

これは多くの市民や企業が参加して柿渋づくりと新たな商品開発を目指したものです。

プロジェクトの実施にあたっては、別件で伊達市を訪れた文化庁の岡部幹彦主任調査官からのアドバイスがありました。岡部氏は、柿は伊達オリジナルのまちおこしとして良い素材であることや、柿渋はいろいろな用途に使えて非常に可能性が大きいことなどを教えてくれました。

また、時を同じくして菊谷秀吉伊達市長も徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」による経済効果と高齢者の生きがいづくりを良い参考例に、伊達でもできることを考える必要があると、シンポジウムで発言していました。

仮に、地元の建築業者などが柿渋を使用することで需要が高まれば、柿の実を集めて換金するシステムも作ることができます。ひょっとすると、高齢者の健康づくりとお小遣い稼ぎの両方が可能になるかもしれません。

4. 柿渋の作り方

プロジェクトの第一段として、柿渋づくりの実験を2011年10月10日に、市役所前広場で行いました。当日は約50人の市民が参加し、商店街の皆さんが着る柿色の半纏も鮮やかに、とても盛況でした。

柿渋の作り方はいたって簡単です(写真4)。まず、



50人で20分ほど作業すると、100kgほどの柿の実が集まった。



柿は「へた」を取り除き、小さく切る。



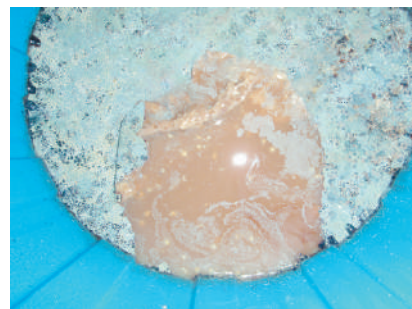
ミキサーで碎き、甕に入れる。



一週間後、甘い香りが漂い、発酵が進んでいることがわかる。



絞りたての柿渋。使った手ぬぐいは日に当てると変色し、すでに薄茶色に染まっていた。



6カ月熟成させた柿渋。表面はカビが膜をはり、天然の落とし蓋の役割をしている

写真4 柿渋の作り方



写真5 柿渋づくりの会場。商店街からは飲み物と食用の見事な柿が参加者に配られた。

柿を青いうちに採ります。この日は約100kgの柿を枝から直に採りました。次に、包丁でへたを取り、実を4等分に切ります。これをミキサーで細かくし、甕に入れるまでがこの日の作業です。

砕いた柿は、伊達市噴火湾文化研究所に持ち帰り、一週間ほど発酵させました。その後、発酵した柿の汁を手ぬぐいなどで絞り、これを一年間ほど熟成させると完成です。用途によってはさらに寝かせて粘性を出す必要もあります。

絞りがすは水を加えて一週間発酵させ、二番汁とします。今回は一番汁と二番汁併せて約30ℓの絞り汁ができました。

イベント当日は、自分で作ったものを持って帰りたいという方もいたため、発酵前に絞った「柿ジュース」をペットボトルに入れてお持ち帰りしていただきました。この時の注意点として、発酵により容器が膨れるため蓋を半開きにしておくこと、多少臭いがあり、虫も寄ってくる可能性があるのを物置などに置くことを伝えました。

なお、柿渋に使う柿はタンニンを多く含む青い柿である必要があります。地面に落ちた柿を使うときは硬いものを選ぶとよいでしょう。また、冷蔵庫で保存して、数がたまってから作ることも可能です。この場合、一週間以上経つと色は青いまですが、渋さ（タンニン）がなくなるため、一週間以内に作るのが良いかと思います。

5. 活かし方を皆で考えましょう！

柿渋プロジェクトは、柿渋づくりをするだけではなく、新たな使い方を考えるのも目的です。伝統的なものも良いのですが、現代的にアレンジする方法もあります。最近ではデニム生地を柿渋で染めた「柿渋デニム」や、麻を柿渋で染めたランチョンマットなども売られています。伊達市の名産である藍染とセットで売り出すこともできるでしょう。

また、木材に塗ることで強度が増すことから、風

雨に強い表札づくりや、古民家から取り出した「古材」を再利用する際に、柿渋を含浸させて強度を高めることもできるでしょう。

使い方はアイディア次第ですので、興

味をお持ちの方や企業の方は秋に行う「柿渋アイディアミーティング」にご参加ください。出来上がった柿渋を手に取りながら、柿渋の可能性について探ってみたいと思います。



写真6 柿渋デニム

6. 地域資源を活かすということ

伊達市噴火湾文化研究所は、地域が持っている資源を現代に活かすための方法を考え、それを市民とともに実践することが業務の一つです。文化財や絵画を保存することも大切ですが、これらを現代の社会に役立たせることこそ重要です。そして、今回の「柿」の活用を考える取り組みは、「心も財布も」豊かになる仕組みを模索する中で、地域特有の歴史と文化を再認識する機会となっている点に意味があると考えます。

地域の宝をみつめ、資源として活用することはまちづくりやまちおこしの基本です。さらに、歴史的な背景を後ろ盾にすることで、新商品であっても価値や信頼性を高める効果を持ち、ブランド化を可能にするのです。

ぜひとも、多くの皆さんに素晴らしいアイディアを出してもらえることを期待しています。それを考える時間はまだまだたっぷりあります。なぜなら、「桃栗三年、柿八年、柚子の阿呆は十三年」というように、道内の他の市町村が真似したくても、八年間は柿の実はないのですから…。

【謝辞】

柿渋プロジェクトの実施にあたり、下記の皆さまからご助言とご協力をいただきました。末筆ですがお名前を記してお礼とさせていただきます。（敬称略・五十音順）

会田朋生・太田和實・岡部幹彦・小野勝多・堅田 進・佐藤靖明・菅 俊二・高梨清一・寺島 徹

【参考文献】

伊達町編、1949『伊達町史』pp.267-268,p.559
渡辺 茂編、1972『新稿伊達町史』pp.146-152
松田 寛、1994「第一編第三章第二節伊達市の樹木」
伊達市史編さん委員会編『伊達市史』pp.63-89



研究報告
【博物館学】

武家文化財調査修復事業について

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員
伊達元成

平成22年度から、伊達市開拓記念館（以下、記念館）に所蔵されている武家文化財の調査と修復を目的に、武家文化財調査修復事業が行われました。どんな内容の事業であるのか、そして何が明らかになったのかをご紹介します。

■オリジナル情報

博物館の史料は、制作年代、制作場所、購入先、価格、材質、用途といった情報をしっかりと調べます。ここではこの情報を「オリジナル情報」とします。

オリジナル情報は展示する際の基礎データとして、民俗学や歴史学、美術史など様々な学問の研究素材として利用される重要なものです。つまり博物館史料というのは、実物のモノ史料と情報によって構成されており、その両方を管理します。

しかし伊達市に寄贈された多くの武家文化史料は、「伊達家伝来の家宝」という状態で寄贈されたので、オリジナル情報が全くありませんでした。おそらく、当時初めて手にしたときはオリジナル情報がしっかり残っていたはずですが、しかし、長い間人から人へと受け継がれる間に、次第にオリジナル情報は消失し、「これは大切なもの」という意識のみが残り、現代まで伝えられてしまいました。試しに開拓記念館に行ってみてください。展示史料のキャプションにはオリジナル情報が乏しいため、制作年代や使用者、用途がほとんど書かれていません。

そもそも、日常生活に根付いたモノであるほどオリジナル情報が消失していく傾向にあります。たとえば、お家にある食器の来歴をすべて把握していますか？

「ああ、そういえばこれは甥っ子の結婚式で相手の両親からプレゼントされたグラスだわ」という情報も、次の世代にはまず伝わらず、グラスだけが伝わっていくと思います。これが十何代も続くわけですから、すっかりオリジナル情報が消失してしまった過程を容易に想像していただけたと思います。

また、江戸時代では大名同士、藩同士では頻繁に調度品の贈与がなされていました。これは力関係を示したり、政治的なバランスを取るために行われていました。

この贈与の度にもオリジナル情報は消失したり、あるいは意図的に伏せられていったと思われます。ところが博物館ではモノと同時にこのオリジナル情報がとても重要になってきます。モノと史料を扱う学芸員にとっても必要ですし、見学に来た来館者のみなさんにとっても、必要な情報です。

しかしもう完全に消失したオリジナル情報を読み解くのは困難な作業です。そのため、ひとつひとつの史料をよく観察し、特徴や素材を把握して、制作年代や用途を探る作業が必要です。

■プロジェクト始動「お宝から史料へ」

開拓記念館が多くの市民の皆さんに利用していただける魅力ある館になるように、また研究者にとっても使いやすい環境に整えるためには、これまで「宝物」として扱われていたモノを「史料」として扱うように位置付ける必要があります。そこで平成22年度から「武家文化財調査修復事業」がスタートしました。

事業の大きな柱は、①展示・保存・管理ができるように修復を行い、②史料の名称・用途を明らかにして、③歴史学的・文献史学的に来歴を明らかにする、としました。

今回の事業では開拓記念館のすべての史料を対象にすることはできませんでしたが、今後の保存・調査・修復の基本的な方針となることは間違いありません。



写真1 修復中の福山先生。ミリ単位の修復が続く

まず、調査と修復の対象とした史料は、伊達成実公旗指物、伊達政宗公書状、伊達成実公書状、洛中洛外図屏風、亘理伊達家雛人形、貞操院御遺物と呼ばれる調度品約160点、古文書史料4点です。

■修復・調査の詳細

1. 伊達成実公旗指物

旗指物は、整理作業中に偶然発見された史料で、形状からみて亘理伊達家二代当主である伊達成実公（1568～1646）のものと見られています。寄贈後も公開されることなく、長年収蔵タンスの中で眠っていたため、ネズミの糞や虫食い、カビが発生している状態でした。

虫食いなどの欠損があると、周りの生地には負担がかかってしまい、そのまま展示してしまうと亀裂が拡大するおそれがあり、安定的に展示することが困難です。旗指物の修復は、これまで開拓記念館所蔵の染織品の修復をしていただいている北星短期大学名誉教授の福山和子先生にお願いしました。

修復はまず旗の裏から柔らかいメッシュの生地をあてがい、これを支持布としました。これは展示したときに旗本体に負担がかからないようにするためのものです。そしてこの支持布に、ヒラヒラと動いてしまう虫食いの切れ端を縫いつけることで、虫食いが目立たなくなり展示した際にも見た目を損なわないようにしました。修復の作業は、よれや弛みがないように一つ一つ細かな手作業で縫いつけました。この修復は春には完了する予定です。(写真1)

2. 伊達政宗公、伊達成実公書状

これら二つの書状は、仙台本藩と亘理伊達家の関係を示すとてもよい史料です。

元々は、手のひらサイズに折りたたまれた形で送られた手紙ですが、ある時、軸に仕立てたものです。こちらも経年劣化のため、紙の一部が破れたり、虫食いがありました。本当は手紙の差出人や、内容が重要になるのですが、掛け軸としたときにはそれなりの風合いが必要です。そのため、貴賓高く高貴な印象になるよう、手紙以外の装具はすべて新しく作り替えました。(写真2)



写真2 修理前(左)と修理後(右)の伊達政宗公書状のカラー写真

3. 洛中洛外図屏風

今回の修復で最も大型の史料である洛中洛外図屏風は、洛（京都）の様子を描いたもので、当時の活気ある人々の様子が描かれています。

この屏風は記念館で展示されていました。昭和60年代に大規模な「昭和の修復」がなされましたが、修復が不十分だったので今回修復しました。

昭和の修復では、一番重要な絵そのものに鉛筆の線が記入されてしまい、それを隠すように上から化粧紙が貼られていることが判明しました。そのため、この屏風は実際の大きさよりもやや小さくなっています。さらに一度解体した屏風を組み立てる際に、絵がずれて接着されており、人物の腰から下が一致していないなど鑑賞上問題もありました。

また絵がずれて貼り付けられてしまっていたので、折りたたんだ時に画面が接触してこすれてしまい、どんどん絵が剥落する状態になっていました。これでは通常の展示のみならず、保管していても破壊が進んでしまいます。つまり「昭和の修復」は破壊を促進してしまったのです。

今回の修復では記念館の史料として、保存管理ができ、年数回の展示に耐えられるようにするため、十分な下調べを行ってから修復をすすめることにしました。

まず、この屏風が作られた年代や作風を調べることから取りかかりました。調査にご協力いただいたのは、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の小島道裕教授



写真3 洛中洛外図屏風の拡大写真。赤い着物の人物の背中に縦に走る線が鉛筆の寸法線。消すことができなかった。

と大久保純一教授にお願いしました。

標準的な洛中洛外図屏風は、京都の西側と東側で見られる景観と風俗が描かれ、二つで1双（一对）とされます。しかしなぜか記念館所蔵の屏風は片隻（屏風の片方の単位）しかありませんでした。もともと片隻しかなかったのか、それとも一雙だったものが、ある時点で片隻になったのか。文献にも記録がなく長い間の疑問でした。

小島先生によると、この屏風は京都の西側が描かれており、屏風の標準的な作り方から見て左隻に相当することがわかりました。さらにその右側の貼紙には「京西山名所 并きたののつ（北野の図）」とあるので、東側を描いた右隻相当の屏風が実際にあったことがわかりました。制作者は不明ですが、同じ工房の作品と思われる屏風が現存しています。その中には、歴博所蔵の「歴博F本」と呼ばれる屏風があり、それには「法眼住吉具慶」の落款がはいっているものがあります。記念館所蔵の屏風の筆者とは考えにくのですが、何らかの関係を持つ工房の作品である可能性が考えられています。

そもっとも興味深かったのは、「貼札の文字は平仮名で書かれているため、女性を意識した作品、たとえば嫁入り道具として作られた可能性も考えられる。」ということです。貼札とは、絵に描かれている寺や橋などの名所がわかりやすいように、その場所に付箋のように貼り付けているものです。かつて屏風は嫁入り道具の一つでもあったため、このことから、もしかしたら歴代のお姫様の嫁入り道具の一つだったのかもしれない。

このような歴史的にも十分史料価値があることが確認されたことから、修理については経験豊富で信頼できる専門家に依頼しました。東京にある株式会社半田九清堂は国宝や重要文化財の修復を数多く手がけており、有珠善光寺の重要文化財についても修復の実績があります。政宗公と成実公の書状、そして屏風図の修理のほか、長年ホコリやカビ、着物のよれやしわが目立ってきたお雛さまのクリーニングを半田九清堂に依頼しました。半田九清堂の仕事はニュースレター第4号でご紹介しています。

書状と屏風は東京の工房に運ばれ、大がかりな解体修復が行われ、お雛さまのクリーニングは、専門家が伊達市に来て開拓記念館で作業を行いました。クリーニングは平成23年の冬に完了しましたので、今年の3月のひな祭りには綺麗になったお雛さまを多くの市民の皆さんにご覧いただくことができました。

そしてこの屏風は、歴博の企画展に出品することになりました。調査をした結果、国内では未発表の貴重な史料であったことと、修理をしたことで貸し出すことが可能な状態になったためです。

4. 調度品の調査

ここでは、貞操院御遺物とよばれる調度品の数々の名称と用途を明らかにする調査を行いました。

伊達市に寄贈されたときに、目録は作られていたようですが、名称や用途がはっきりしないものがいくつかありました。また、寄贈を受けた段階ですでに化粧道具や椀や皿といったお膳の組み合わせがバラバラになっており、どれが本来の姿なのかがすっかりわ



写真4 解体修理される洛中洛外図屏風。骨組みだけでなく、絵のはく離を防ぐ処置や、一部には補彩して再び組み立てられる。

からなくなっていました。

調度品をよく見てみると、女性が使う鏡や化粧道具が多く占めていることがわかります。そこで、化粧文化研究の第一人者であるポーラ文化研究所の村田孝子先生に調査をお願いしました。

160点以上の史料を一点ずつ確認し、写真撮影をおこなった上で、道具の形、描かれている家紋、模様からグルーピングしていただきました。

その結果、これまで硯箱とされていたものが御料紙箱に分類されることや、鶴の骨で作られた簪（かんざし）が含まれていることがわかりました。

このような情報は、わかりやすく解説するための貴重な情報となります。

5. 古文書解読調査

最後は文献史的な調査です。伊達家古文書史料の中には、藩主から下賜された品物や結婚に関する記録が残されているものもあります。修復した史料や、調度品の年代がおおよそ判断できたことで、次は古文書を調査して、現在記念館にある調度品の贈与の記録がないか調べました。

伊達家古文書史料の中には、亘理伊達家の日常や本藩からの通達文、自然災害や奇妙なうわさ話などが記録された史料があります。これを解読し、贈与の記録を探ることにしました。平成23年に刊行した「亘理伊達家史料」の監修をいただいた北海道教育大学函館校の佐々木馨教授に、再び古文書の解読をお願いしました。古文書は4冊分ですが、解読を進めるうちに江戸時代の亘理伊達家と亘理町の様子が明らかになってきました。

中には宝永3年に亘理町に「大波」が押し寄せた記録が見つかり、荒浜の一部が海に浸かったという現象が明らかになりました。これが津波によるものなのか、それとも高潮によるものなのかは現時点では不明ですが、百数十年前にこのような現象があった

ことは確かであり、今後防災等に役立つ史料といえます。

■今後の予定

武家文化財調査修復事業は平成23年度で完了しますが、これからは解読された古文書から贈与された調度品や、時代背景を調査していきます。また修理が完了した屏風などは、これまで以上に温湿度管理が求められます。史料に適した環境を維持しつつ、これまで「お宝」とされていた武家文化財が、「博物館史料」となる第一歩を無事に歩めるように、そして、市民の皆様へ新しい発見と、新しい歴史像をお伝えできる日が早く来るように引き続き調査をすすめていきます。

【展示会情報】

伊達市開拓記念館所蔵の屏風が展示されます。

人間文化研究機構連携展示

都市を描く—京都と江戸—第1部

「洛中洛外図屏風と風俗画」

期間：2012年3月27日(火)～5月6日(日)

場所：国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）



写真5 黒漆地蟹牡丹竹雀紋歌書筆箱 江戸時代後期の作品だが、戸を開けたまま長年展示していたため、閉まらなくなった。



■伊達市民生活文化伝承者の姿

これまで伊達市では、伊達の伝統的な産業、芸術、その他市民生活文化の伝承に貢献されている方を伊達市民生活文化伝承者として認定してきました。現在まで23名が伝承者として認定されています。

ここでは、伝承者の方が活躍する姿をご紹介します。

佐藤 三治 法螺貝吹き



大正12年 伊達市生まれ
昭和10年 法螺貝吹きを習い始める
昭和24年 陸軍除隊後、小学校の行事等で披露し、後継者の育成に努める
昭和61年 伊達市民生活文化伝承者認定



昭和59年の武者祭りで“出陣”する佐藤さん。

馬に乗り、片手で手綱をさばきつつ、法螺貝の音で騎馬隊の態勢を整えた。

Newsletter 【噴火湾文化】 第6号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5

TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445

E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp

URL <http://www.funkawan.net/index.html>

●印刷 (有) 共立印刷

〒052-0022 伊達市梅本町4番地4

TEL. 0142-23-2175 FAX. 0142-25-1971

2012年3月31日発行